**田中　俊平 （たなか・しゅんぺい）**

**１、プロフィール**

弘前大学教育学部在学中に友人からの刺激で文学に目覚め、教員として下北に赴任してから本格的に詩作に取り組み、「下北文化」を中心に活動し、詩集『青い墓標』を遺した。

＜生没＞

1948（昭和23)年１月11日～1998（平成10）年４月10日

＜代表作＞

『青い墓標』（昭和47年８月１日・ＯＲＡ詩社）

＜青森との関わり＞

青森市に生まれ、弘前大学教育学部に学ぶ。大学卒業後、むつ市の小学校に11年間勤務して岩手県に転居。

**２、作家解説**

弘前大学教育学部在学中、「児童文化研究部」に所属し、先輩や仲間達に触発されて文芸誌「はまなす」に、処女作である「花道」という童話を載せる。

その後、同人誌「二十一世紀」に参加して童話を書いている。同人某が彼を表して「見ると、何も考えないで眠っているようでもあり、また、眠りながら何かを考えているようでもある」と紹介しているが、的を射ていると同意する仲間もいた。

昭和45年、小学校の教員として下北に赴任し、大学のサークルの先輩である竹浪和夫氏との交流が再開され、詩歌誌「オーロラ」創刊号に詩を書き、本格的な文学活動が始まる。本名の田中俊幸からペンネーム俊平に変えたのもこの時からであった。

「オーロラ」は２号から「ＯＲＡ」に改題したが、１年近くの間に10号まで発行され、彼の詩も30編に達し、「ＯＲＡ」で「田中俊平特集」が組まれるにいたる。

当初、詩歌誌の特集として編集されたが、昭和47年８月、詩人藤田勇三郎、恩師松井泰等に後押しされて活版の『青い墓標』を発刊することになる。そのあとがきに、文学を目覚めさせてくれた竹浪氏のことや「複雑な社会構造の現代においてこそ、人間は孤独を愛し、芸術を愛すべきだろう」と詩を書き始めた理由を書いている。

下北在住中に、月刊誌「春秋東奥」にも誌を発表している。

「ＯＲＡ」が14号で休刊すると、秋元良治氏を中心に発刊準備をしていた「下北文化」を竹浪氏・渡辺悟氏と３人で編集を開始し、昭和48年２月に創刊号を発行する。

創刊号、２号、３号、４号、５号と詩を載せ、６号には随筆「自画像」で自らの少年時代を母の思い出と共に振り返り、現在に思いを致している。その後、７号、９号、13号に詩を発表しているが、13号は編集をほぼ一人で担当し、「（以後も）順調に発行していきたい」と編集後記に書いている。

14号（昭和54年10月）の詩掲載を最後に「下北文化」への作品掲載を終えている。

その後、昭和56年３月、11年間の下北生活にピリオドを打ち、岩手県に転居する。後に、妻の実家の千葉に改姓し、社会教育主事等を務め、平成10年４月10日逝去する。享年51歳。岩手県下閉伊郡岩泉町立安家小学校長在職中であった。

**３、資料紹介**

〇『青い墓標』

図書

1972（昭和47）年８月１日

190mm×150mm

題材ごとに分類すると①海に関するもの②霊魂に関するもの③母に関するものの３本となる。中に１編だけ叙事詩の傾向の作品もある。あとがきに、「自信をなくした時、私は山を眺め、松井先生を思い出す。そして、弱い心に鞭うちながら筆を取る」とある。